



<短い夏休みが終わりました…今日から2学期です>

新型コロナウイルス感染症拡大のため、今年の春は長期にわたり休業が続きました。そのため、授業時間を確保し、学びを保障する観点から今年は**夏休みが2週間ほどに短縮**され、気が付けばあっという間に終わりを告げました。本来ならば、夏休みというのは計画を立てて自分の学びを深めたり、また部活動では日々の練習ではできないような取り組みを通じて技術力を向上させたりできる良い機会なのですが、今年は残念ながら「小休止」といった感が否めないものでした。しかし、短い夏休みでも、**最上級生の3年生は進路実現に向けてよく努力している姿**が伺えました。現役生と既卒生で最も差が出やすいと言われている理科や社会は、課外に積極的に参加して学習を進め、また自習室では、日々多くの生徒が長時間にわたって黙々と学習に励んでいました。今年の夏は短かったかもしれませんが、**皆さんが頑張った成果は今後、秋以降に必ず現れます**。まだまだ暑い日は続くかもしれませんが、生徒の皆さんには、せひ気持ちを新たにして、今日から始まる2学期を元気に過ごしてほしいと思います。

9月の進路関係行事

- 2(水) 小論文・面接説明会③
- 4(金) 大学入学共通テスト説明会③
- 5(土) 土曜課外①②
土曜講座①
学習会②
理社課外③
- 11(金) 進駿共通テスト模試③
[~12(土)]
- 12(土) 土曜課外①②
土曜講座①
学習会②
- 16(水) 月曜授業
- 18(金) 模擬裁判①
小論文ガイダンス②
- 19(土) 土曜課外①②
土曜講座①
登校学習会②
理社課外③
- 22(火) 理数科説明会(午前)
- 24(木) 定期試験時間割発表
- 25(金) 大学出張講座②
プレゼン講座③

※○数字は学年を示します

<「問い」を持つこと…篠原校長先生のお話から>

たとえば、眼の構築は、何よりもまず、光によって提起された問題の解決である。
ジル・ドゥルーズ『ベルクソンの哲学』より

1学期の終業式で篠原校長先生は「**問いを持つこと**」の大切さを語られました。その話を聞き、私は自分の大学時代に受けたある授業を思い出しました。英文学を担当していたM原教授は、福田恆存に師事していた先生で、学内ではとても厳しいことで有名でした。一番最初の授業の時、M原教授は教室の扉を開けてゆっくりと教卓に歩み寄り、学生の顔を見渡したと思った瞬間、いきなり黒板に向かって「**自明の理を疑え**」と書き付けました。そして振り向きざまに「人を殺すことは本当に悪いことか？」と低い声で問いかけました。私たち学生が面食らって答えに窮していると「ならば何故死刑が制度として存在し、人殺しは一向になくならない?」「お前たちはそういうことを少しでも考えたことはあるか?」と畳み掛けるように仰られました。今思えば、先生のやや大袈裟な物言いや立ち居振る舞いは、大学に入学したばかりの呑気な学生たちを意図的に刺激しようとする行為だったのでしょう。しかし上京して間もない当時18歳の私はまんまと先生の挑発に乗り「**大学の授業って訳が分からないけど、面白い!**」と思い、英文学を通じて「**答えのない問いに答える**」という知的訓練をM原教授のもとで行えることが楽しみとなったのでした…。

篠原校長先生は「**問いは違和感から生まれる**」と仰いました。「自分の中にあるモヤモヤした気持ちに向き合い、それを楽しむことが大切だ」と。いわゆる「受験勉強」として皆さんが取り組んでいる問題には正解がありますね。無いと困ります。でも、長い人生の中には、「正解がなかったり」、逆に「答えが無数にあたりする」問いというのはいくらでもあります。そうした「**問い**」に自分なりの**答えを出していくこと**(例えば、いくつかの生物が光に対して眼という器官で答えを出したように)、それが「**生きる**」ということなんだと思います。でも、まずは「**問い**」を持つことから始めましょう。自分の中の違和感(モヤモヤ)から「**問い**」が生まれることもあるでしょうし、自分が普段当たり前だと思っていることを疑ってみることからもきっと「**問い**」が生まれるはずです。そして知的誠実をもって、その「**答えのない問い**」に答えることで、皆さんは「**自分の人生を生きることができる**」のではないのでしょうか。

<大学入試情報>

コロナ禍を受け、文部科学省が各大学に求めた入試の個別試験での配慮について、各大学の対応の一部が明らかになってきましたので、以下に紹介します。

入試の出題範囲配慮等を決めた大学

受験生を集める学力検査を実施しない

★横浜国立

発展的内容を出題しない

★帯広畜産、北見工業、秋田、茨城、宇都宮、埼玉、東京外語など

選択問題を設ける

★室蘭工業、山口、長崎

補足説明を付けて発展的内容を出題

★北海道、弘前、筑波、東京工業、東京農工、東京海洋、**山梨**、富山、静岡、浜松医科、岐阜、名古屋、名古屋工業、京都工芸繊維、香川、九州、佐賀、大分、熊本、鹿児島、東京都立、横浜市立、名古屋市立、上智、東京理科、中央など

複数の配慮の組み合わせを行う

★東北、山形、福島、東京医科歯科、電気通信、愛知教育、信州、奈良女子、福井、長崎、大阪府立など

出題範囲を変更しない大学：岩手、東京、京都、早稲田、慶応義塾、関西など

各大学の対応について具体的な情報はそれぞれの大学のHPにアクセスして各自できちんと調べましょう。また、先月行われた**大学入学共通テストの受験日程の意向調査**では、**第一日程（1月16、17日）が約43万1千人、第二日程（1月30、31日）が約3万2千人**で、第二日程の希望者は高3生の1割弱となりました。今後もコロナ禍の対応で様々な変更があるかもしれません。3年生は特に情報収集に努めてください！

<進路を考えるヒント>

NO IMAGE

今回は白井聡著「武器としての『資本論』」(東洋経済新報社)を紹介します。本校の図書室をふらっと訪れた際、入口近くの新刊書コーナーに置かれていたこの**真っ赤**な装丁の本に目が留まり、すぐに借りて読んでみました。いわゆるレコードやCDの「ジャケ買い」に近い行動ですが、ダウンロード・サブスク世代の生徒には意味不明でしょうか?「ジャケ買い」に当たりはずれは付き物ですが、今回のこの本は「当たり」でした。理由は2つです。一つ目は、この本が**マルクスの『資本論』の非常に分かりやすい入門書になっていること**。もちろん、分かりやすいといってもマルクスの用いるキー概念を理解するのはたやすいことではありませんが、白石氏は卑近な例を効果的に用いて、読者が「こんなもん分かん!」とって本を手放しそうになるのを上手に回避しています。二つ目は**マルクスの思想的射程の広さが感じられること**です。**カール・マルクス**と言えばもちろん19世紀の哲学者・思想家ですが、彼の思想が、時間的にも空間的にも遠く離れた現代を生きる私たちが直面している問題を捉えるのに有用であるとは、本当に驚くべきことです。その中でも、個人的に特に気になった箇所は「**教育の商品化**」です。教育を商品とみなすと、**学生は消費者化**してしまいます。そして**消費者は受動的**です。学校が誇大広告ばりのきれいなパンフレットを競うように作成し、「お客様は神様だから、もてなさなければならぬ」というような姿勢で学生を集める。(耳が痛いですね)でも著者は「**神様にもものを教えることはできません**」と述べ、「**教育の商品化を止めない限り、教育は立て直せない**」と警告します。私も教育に携わる者として、筆者に満腔の同意を与えます。本当に「**資本主義の内面化**」って恐ろしいですね。